

ネパール東部山岳地域における自然資源管理
- 移牧システムによる草地、耕地
および森林の管理に関する書誌的研究を中心に -

熊谷元

1. 背景と目的

アジアにおいては膨大な人口を養うため、耕地面積の拡大と単位面積当たりの穀物収量の増加を目的とした技術革新が試みられてきたが、近年これらは限界に近づきつつあるといわれる。特に熱帯アジアの途上国の人口は今後も上昇することが確実視される上、所得水準の上昇に伴って乳・肉の需要も急増している。今後アジアでは耕地における食糧穀物生産と飼料用穀物・飼料作物生産との競合が熾烈になると予想されるが、問題の解決のためには、灌漑設備、化学肥料、農薬、貯蔵施設等の資本を必要とする、従来型の多投下・多収量を目指す方式に加えて、高地、傾斜地、半乾燥地等の低投下・低収量によってのみ持続生産可能な地域において、地域資源をどのように活用していくかが大きな意味を持つと考えられる。

このような地域は、熱帯砂漠の周辺に位置するサバンナ気候帯や、極地の周辺に位置するツンドラ気候帯をはじめとして、実は全陸地の60%以上を占める。資源管理においては自然条件の把握とその利活用が問題となるばかりでなく、地域におけるエスニックグループ間における利害調整や、国内・国際社会の政治経済的状況も大きく反映されることが、アジア・アフリカを中心としたこれまでの事例から示唆される。

ネパールは北緯26-30度に位置し、国土総面積が14万8千km²、人口2400万人の小国であるが、国土全体にまたがる200m~8800mの極めて大きな標高差が、亜熱帯モンスーン気候から極地気候までの環境帯を創生する、世界でも希な国である。従来から定置農業のみならず、移牧及び移牧と耕作を組み合わせた農業システムが山岳地域を中心に伝統的に見られる。また、土地利用に関しては、隣接した地域においても、標高の異なる土地に、異なる土地利用形態

が認められる。これには自然条件の違いだけでなく、民族的・歴史的背景とともに、近年の森林政策が色濃く反映している。

本研究では、主にシェルパ民族の居住するネパール東部山岳地域内のサガルマータ県、ソル・クンプ郡においてこれまでの行われた調査成果を概観し、特に移牧システムによる草地、耕地および森林の管理の状況と近年におけるその変容に焦点を当てて解説し、それに関して若干のコメントを加えたい。

2. ネパール全般およびソル・クンプ地域の地理・自然条件、民族事情、産業構造

(1) ネパールの地理・自然条件、民族事情、産業、行政区分の概況

ネパールの国土はその標高から以下のように地理的に区分される。

- 1) タライ平野 (Terai): 標高 300m以下のインドガンジス平野の延長上にある平地である。国土面積の 23%、人口の 45%を占める。亜熱帯性気候で農業灌漑施設も比較的整う穀倉地帯である。
- 2) 丘陵地帯 (Hill): 標高 300 ~ 2500m の丘陵地。国土面積の 42%、人口の 46%を占める。温帯性の気候で、灌漑は困難な場所が多く、社会資本整備も遅れ、雑穀栽培が中心。とくにカトマンズで人口圧力が高く、相当の奥地、急斜面まで棚田や段々畑として活用されている。
- 3) 山岳地帯 (Himalaya あるいは Mountain): 標高 2500m以上の地域で国土面積の 35%、人口の 7%を占める。高山性寒冷気候で穀物生産には不向きである。

以上の 3 地域が南から北へ順次ベルト状に並び、気候も同様に亜熱帯性気候から温帯、寒帯と幅広く連続的に推移している。全般的には大陸性気候の性格を呈し、モンスーンの影響を受けて乾季と雨季の差が著しい。また気温の日内変動も大きい。国土全体に占める耕地、放牧地、森林および氷雪地の割合は各々、18%、13%、38%および 15%で、従来森林であったところが農地として利用されている地域が多い。

インド・アリア系、モンゴロイド系、チベット系にわたる多民族国家で、主な民族だけでも 20 以上あるといわれる。タライ平野には主にインド・ヨーロ

ツパ語系、丘陵地帯には主にインド・ヨーロッパ語系とチベット・ビルマ語系、山岳地帯には主にチベット語系の民族が住む。

ネパールの一人あたり GDP は 225USD (1998/99)、農業に従事する人口は 80%で、低所得水準の農業国として概括される。農業は、GDP の 40%を占め、その関連産業を含めると 50%を超える。主たる農産物は米、小麦、とうもろこしである。サービス業の対 GDP 比率は 30%で、農業とその関連産業に次いで多く、工業(18%)、製造業(8%)がそれに続く。人口増加率は 1970 年代以降、年平均 2-3%で、同時期の経済成長率(年平均約 3%)をほとんど相殺してきた。

ネパールの行政区分は、国土の東から、東部開発地域、中部、西部、中西部および極西部開発地域の 5 つの地域 (Region) に分けられ、各地域は 2~3 の県から成る。各県は、さらに 9 から 19 の郡から成る。

(2) ソル・クンブ郡の地理・自然条件

ソル・クンブ郡はネパール東部開発地域、サガルマータ県の最北部に位置し、郡の北にあるチョーオユー、サガルマータ (エベレスト)、ローツェの 8000m 峰がチベットと境を画し、南にはオカルドゥンガ郡とコタン郡が続く(図 1)。陸路では他の郡のどこからも自動車道がないため、例えばカトマンズからソル・クンブ郡に入るには、ファフルー、ルクラ等の空港を利用するか、中部地域のジリ (標高 2100m) まで自動車です 10 時間程度かけて東進し、標高 2700m のデラウリ峠と、同 3500m のルムジュラ峠を越えてさらに 2~3 日かけて徒歩で行くしか方法がない(図 2)。一方東部開発地域内の南部カタリにはタライ平野を東西に貫く自動車道から車でのアクセスが可能なので、標高 3000m の郡境ジャンタルダープ峠を越え、一旦標高 1700m まで下った後北上し、5~7 日かけて徒歩で入る行程がある。このルートはオカルドゥンガやソル・クンブ郡内への商品供給の大動脈となっている。この道沿いに主な村が連なっている。

郡境のジャンタルダープ峠からは、ソル川沿いにサルメ村 (標高 1750m)、サカル村 (2000m)、ソル・クンブ郡庁サレリ、ファフルー (2400m)、ジュンベシ村 (2500m) を経、最も奥地のパンカルマ村とモブン村 (2900m) に至る。ソル地域はソル・クンブ郡の南部にあたり、上記の各村を含んでいる。標高 6957

mのヌンブール峰の南側に開いたジュンベシ川とベニ川に開いた谷底の高さ2500～3000mのゆるやかな谷に開かれ、両側の尾根も標高3500～4000mでそれほど急峻ではない。谷の上流はU字峡の氷食谷が続き、特にジュンベシ谷の背後には標高4500～5000mの台地上の高地が広がり、放牧地として利用されている。ファフルーにおける年平均気温は11前後、最寒月（1月）の月平均気温は3、最暑月の（8月）月平均気温は18である。

一方、クンプ地域はソル・クンプ郡の北部にあたり、ジュンベシ村から一旦ヌンブール峰から延びた東側の尾根を越えた後、道沿いにルクラを経て入った、広い谷の集合した盆地状の高地である。西側にヌンブール峰、コンデ・リ（標高6187m）、東側にタムセルク（同6623m）、アマ・ダブラム（同6812m）が聳え、中心的な村としては南部からナムチェバザール（同3440m）、さらにクンデ村とクムジュン村があり、各村の標高は3900m前後である。さらに谷の奥にはターメ、イムジャ、パンボチェ、ディンボチェの各集落が氷食谷の底に立地し、その標高は3900～4200mで、ソル地域よりさらに1500m程度高い高度域にある。クンプ地域の氷食谷は盆地状の広い緩斜面で、標高5000mまでが放牧地として利用されている。

（3）ソル・クンプ郡における民族事情

ソル・クンプ郡に接する南部のオカルドゥンガ郡ではチベット・ビルマ語系言語を母語とするネワール、グルン、ライ、タマン、マガール等の民族が居住し、シェルパ民族は少数である。ソル・クンプ郡の南部、ジャンタルダープ峠からサルメ村まではシェルパ民族とマガール民族あるいはネワール民族が共存する村があるが、サカル村から北はシェルパ民族が占める割合が高くなっている。ソル・クンプ郡全体の人口は9万4千人（1991年）である。

シェルパ民族は「骨」を意味するいくつかの父性クラン（父系の祖先を共有する出自集団。ただし始祖と成員の系譜関係は必ずしも明確ではない）に分かれ、クラン同士は近い系譜関係にはあるとされるが、通婚は禁止されている。ソル地域の一行政単位（ガビサ）、ベニ・ガビサ（ジュンベシ谷とベニ谷を含む広い地域を包括する）を例にとると、カンバチェ(67戸)、ラマ(58戸)、サラカ

(44戸) ゴパルマ(16戸) タクトック(14戸) ユンコルマ(10戸) ピサナ(8戸)の7クランが居住し、一つの集落は基本的に一つの優勢なクラン集団によって構成されている。一方、クンプ地域では、この村落構造が全く異なっている。クンプの中心村、ナムチェバザールを例にとると、クンプ全体では16クランが居住し、一つの集落に様々なクランに属する住民が混在して住んでいる。この村落構造の違いが、土地利用と資源管理システムの違いに影響を与えている。

(4) ソル・クンプ郡における農業生産

ネパール山岳地帯における農業の概要を標高別に概括すると、放牧の上限が標高5000mであるが、降雪のため冬には3000mとなる。農耕の上限は3000mで、ネパール国内で栽培面積の大きいイネは2000mまで、トウモロコシは2700mまで栽培可能である。また、タライ平野と比べて、イネの栽培面積は小さく、穀物の中ではトウモロコシとオオムギが比較的多い。家畜に関しては、ネパールで飼養頭数の多い家畜はウシ、ヤギ、スイギュウ、ヒツジ、ブタであるが、山岳地帯においてはヤク、ウシおよびゾム(ヤクとウシの交雑種)の占める割合が多く、ブタは少ない。

ソル・クンプ郡でもこの傾向は認められる。イネは南に接するオカルドウンガ郡より下では見られるが、ソル・クンプ郡では栽培される地域が非常に少なく、2000mを境に全く見られなくなり、代わりにシコクビエ、さらに高度が上がるとトウモロコシが栽培される。ソル地域ではジュンペシ谷下部ではトウモロコシがよく見られるが、さらに谷の上部ではトウモロコシは姿を消し、代わってオオムギ、コムギ、ジャガイモが栽培される他、リンゴやスモモを作る農家もある。これらの作物の栽培も標高3000mで終わり、パンカルマ村より高度域には集落はなく、モミヤツガ等の森林地帯が始まるが、そこはヤクやゾムの夏季放牧地でもある。一方クンプ地域では標高4000mを越え、農耕限界とされる4300mまでの高地でもオオムギやジャガイモを栽培している。耕地限界が1000m以上もクンプ地域で高い理由として、クンプ地域はソル地域に比べて乾燥しており、冬でも降雪量が少ないという自然条件も考えられる。しかし歴史

的には以下のような説明がなされる。現在のシェルパ民族の祖先は 16 世紀にチベットから南下し、ヒマラヤを越えてネパール側に移住してきた。当該地域ではまずシェルパ民族は耕作が可能なソル地域に定着したが、後発的に移住を開始したシェルパ民族は、農耕が容易な比較的標高の低い土地は他の民族や先住のシェルパ民族によって占められていたため、さらに高地に住まざるを得なかったと考えられる。この相違点は、後述する移牧システムの違いに大いに関係する。

3. ソル・クンプ地域における移牧システム

(1) 山岳地帯におけるウシ、ヤク、ゾムの種類と利用

山岳地域において、特にシェルパ民族が飼養している家畜の種類と構成は非常に多様である。飼養頭数の多いウシ、ヤクおよびゾムに関する名称の定義と用途は以下のとおりである。雌雄の総称としてヤク(*Bos grunniens*)があるが、雌雄を区別する場合は、雄はヤク、雌はナクと呼ばれる。ウシ(*Bos indicus*)とヤクの交雑種は、雌雄および交配の組み合わせにかかわらず、総称としてゾムとされるが、ウシ(雄:後述する高地種「ゾラン」)をナク(雌)に交配して生まれたものはディムズといい、その雌はディムズ、雄はディムズゾプキョと呼ばれる。一方ヤク(雄)をウシ(雌:後述する中間種「シャクツアム」、中低地種「シュクツアム」あるいは低地種「パラン」)に交配して生まれたものはウランといい、その雌はウラン、雄はウランゾプキョと呼ばれる。各種で適応高度が異なり、ヤク(ナク)は 3000~5000m、ディムズ(ディムズゾプキョ)は 2300~4500m、ウラン(ウランゾプキョ)はディムズよりもやや低い標高で飼われる。ウシはさらに適応高度が低いとされるが、高地種(雄:ゾラン、雌:キルコム)、中間種(雄:シャクツア、雌:シャクツアム)、中低地種(雄:シュクツア、雌:シュクツアム)、低地種(雄:ロクラン、雌:パラン)に分類されるように、品種によっては比較的高い高度にも順応できる。ヤク群(雌:ナク)とディムズ群(雌)は牧者により群として飼養され、移牧されることが多いが、それぞれの適応高度と移動時期が異なるため、両者が同一の群として飼養されることはない。ヤク(雄)はナクの再生産のためにナク群に 1 頭のみ入

れて移牧される場合と、特別に飼いならして舎飼いし、雌ウシを連れてきて交配させてウランを生産する場合がある。高地種ウシの雄ゾランはディムズの生産のためナク群に 1 頭のみ入れて移牧されることが多く、生産されたディムズ（雌）の泌乳能力は高いが、ディムズゾプキョ（雄）は繁殖能力を持たないため、主に運搬用に利用される。中間種ウシの雄シャクツアはディムズ群に入れて移牧されることが多い。ウランは低地にも適応するため舎飼いされることが多い。ヤク飼養者はナクを再生産し、その乳を利用するが、その主目的は高地種ウシの雄ゾランを交配してディムズを生産することにある。その泌乳能力の違いにより、ディムズ仔は約 8000 ルピー、ナク仔は約 2000 ルピーで売れるが、ヤク（雄）は種雄として利用する以外には価値がないので放置して死なす場合がほとんどである。ディムズ（雌）飼養者はその泌乳能力を利用して乳生産するのが主目的であるが、前述したようにディムズゾプキョには繁殖能力がないため、ディムズ群のみによる再生産は不可能である。したがってディムズ（雌）飼養者は群の維持のためにディムズをヤク飼養者から購入する。乳生産のために行う通常の交配は、生まれた仔の能力を期待しないためどこにでもいるシャクツアを用い、生まれた仔は価値がないので放置して死なす場合が多いが、仔が生き残った場合は乳生産や運搬に用いられる。

（2）ソル・クンプ郡における移牧システム

1）ソル地域の移牧システム

ソル地域において、各集落は単一のクランで構成されていてクラン単位の共有地として森林や草地が細かく区分されている。そしてそれぞれの区画は原則としてクラン成員しか利用できない。ただし異なるクランに属する人でも、使用料を「ミザール」と呼ばれるクランの代表者に支払えば放牧することができた時代が長く続いた。後述するように、ソル地域では森林の国有化後も国家の支配が末端まで及ばなかったため、草地と森林はクラン単位で共有されていたからである。クランのほぼすべての世帯が家畜を飼養しているが、ナク群あるいはディムズ群を飼養しているのはクランの一部の世帯で、耕作との兼業として移牧を行っている。すなわち 12 月から 4 月までは家畜を集落の近くの森まで

降ろす。5月になると世帯の一部成員が、徐々に家畜を谷の上流に移動させる。集落より上の高標高地は草地か森林である。8月から9月にかけて標高4000mの夏営地で放牧し、牧者は石積みの小屋で過ごす。10月からは林間放牧させながら再び集落に移動させる。春と秋の林間放牧では、牧者は短期間で移動するため木組みの仮小屋に住む。また、ナク群とディムズ群が同じ群れで移牧することはない。耕地があるのは集落の周辺のみで、作物生産をすると同時に冬の間の貯蔵飼料を調製する。コムギワラ、オオムギワラおよび穀物収穫後の6・7月から9月の間に畑に繁茂した雑草や、9月のトウモロコシ収穫後に畑に残った茎葉部が貯蔵飼料の主体で、9月下旬から10月にかけて作られる。12月から4月の舎飼期は、排泄された糞尿を森林の枝葉や枯草等と混ぜて堆肥を作ったり、直接畑に家畜を入れて施肥を行う重要な期間である。3月以降には貯蔵飼料が不足することがあり、その場合は集落からかなり離れた山に出かけて野草を刈り取り、運搬する。このようにソル地域の移牧は1年に1回のサイクルを持つ。ナク群あるいはディムズ群を持たない世帯は中間種ウシ（雄：シャクツア、雌：シャクツアム）、中低地種ウシ（雄：シュクツア、雌：シュクツアム）、低地種ウシ（雄：ロ克蘭、雌：パラン）を、家に付随した別棟の家畜小屋で飼っている。以上をまとめるとソル地域の農業は、世帯内で農耕と移牧を役割分担して兼業される「農牧分離型」の「定農移牧」であり、飼養家畜は移牧するナクあるいはディムズ群のみならず世帯によっては舎飼いのウシのみの場合もある。また飼養の主目的は畑への施肥、乳生産、ナクの再生産およびディムズの生産販売等多岐にわたり、移動要因は牧畜にあり、農耕にはないと考えられる。また先に述べたように単一克蘭単位で放牧地管理を行っている。歴史的に、最初にソルの地に移住してきたシェルパ民族はそこで農耕に適した豊かな谷を手に入れることができ、克蘭単位の集落をなして暮らした。これが上記の移牧システムの素地となったと考えられる。

2) クンプ地域の移牧システム

クンプ地域の村は、その多くが標高3400~4000mの間に位置している。そして各村の住民が農業や牧畜に利用する土地は、その村を含む一つあるいは複数

の特定の谷の流域に限定され、移牧はその範囲内で行われる。狩野（1996）はこの範囲を生活圏と名づけている。各世帯はその生活圏のなかに3～4あるいはそれ以上の家を持っているため、複数の世帯によって形成された小集落が生活圏の中にいくつも存在する。標高4300m前後の農耕限界より下部の集落はその周辺に耕地を伴っているが、これには耕地を異なる高さに分散させることにより、労働力の時期的散開による生産性の増加と危険の分散を図る意味があるとされる。また耕地が存在しない標高4300～5000mにも集落がある。通常6月から9月のモンスーン期には気温が高く、降水量が多いため、5000m近い高地で家畜は放牧される。家畜はナク群が主体でディムズ群は少数である。9月以降、低標高地の収穫が終わり、気温が下がり始めると、まずディムズ群が次いでヤク群が谷を降り、冬営地のある最も低い標高帯に移動する。この時、中間の標高地にある森林帯の林床の植物や木の葉を利用した林間放牧も重要な位置を占める。また各世帯は飼料が不足する冬季に備えて雑草を主体とした乾草を9月下旬から調製し、標高の異なる各家に備蓄しておく。翌年1月までは家畜は最も低い標高にある集落で飼われるが、最低標高地に備蓄した乾草が不足する2月から3月にかけて再び谷を上り、各標高地の家に貯蔵しておいた乾草を利用する。これは各標高地集落周辺の畑への施肥の目的もあるとされる。一旦4月に最低標高地に降りるが、5月以降気温の上昇に応じて再び順次標高をあげて放牧すると同時に、各集落周辺の畑の耕作を開始する。6月下旬から7月上旬以降は、家畜は耕作限界以上の標高で飼われる。谷によっては年3回の上下移動がみられるところもある。家畜の移動時期は村ごとに決められた「ナワ」と呼ばれる管理者が行う。特に6月下旬～7月上旬から9月にかけては家畜は厳格に耕作地から排除される。このようにクンプ地域の農業は、耕作と牧畜とが世帯レベルにおいて不可分の生業として統一され、「農牧結合型」の「移農移牧」であり、家畜はナク群が主体で飼養の主目的は畑への施肥とナクの再生産およびディムズの生産販売、移動要因は農耕と牧畜の双方にあると考えられる。また先に述べたように複合クランからなる村落単位で放牧地管理を行っているクンプ地域のシェルパ民族は、歴史的により高地への定住を余儀なくされたグループであり、限られた土地を最大限利用する必要に迫られたため、異なる標高に分

散した高地を利用するようになったと考えられる。

3) ソル地域におけるヒツジとヤギの移牧(西ヒマラヤ型移牧)

ソル地域には、ある時期に低地の民族がヒツジとヤギを連れて移牧している土地がある。この移牧方式はネパール、インド、パキスタンにまたがる山岳地帯において広範に見られる、長距離かつ大きな高度差にわたる季節移動で、西ヒマラヤ型移牧と呼ばれる。ソル地域を利用する西ヒマラヤ型移牧を行うのはオカルドゥンガ郡のルムジェータル村から来る人々である。この村は標高 1300 m の丘陵地帯にあり、比較的温暖な気候に恵まれていて畑ではトウモロコシとシコクビエの二毛作が可能で、イネも栽培される。住民の半数はグルン民族で、移牧に従事するのは全 566 世帯中 24 世帯で(1994 年当時)、グルン民族がその過半数を占める。移牧の間も家族は村に残る。移牧は数人のグループで行われる。以下は移牧の 1 例である。同一クランに属する年配のグルン民族(2 名)と、彼らに雇われた他民族の若い牧夫 4 名がチームを作り、ヒツジ 470 頭(種雄 20 頭と雌 450 頭)とヤギ 30 頭の家畜を連れ、3 頭の番犬とともに移動する。10 月にソル地域を離れて南下を始める。この時期は山岳地帯から丘陵地帯にかけての中間山地より低い標高地では作物の収穫をひかえているので、家畜を放牧できる箇所は限られている。街道を夜中に移動することもあり、主な放牧地は森林で、下草を利用する。9 月から 12 月はヒツジの出産シーズンであるため、子羊を連れての移動となる。12 月上旬に標高 1000m 以下のマハーバーラト山脈南斜面の村々に到着し、収穫が終わったシコクビエ畑と周辺の森林に、この地域の住民がトウモロコシを播種する翌年 3 月まで滞在する。この地域は冬季もかなり暖かく、飼料資源も多いため、寒さに弱い新生仔の育成によい上、新生仔を生んだ授乳期の母ヒツジに十分な栄養を与えることができる。1 月中に子ヒツジは離乳し、雌は群れに残し、雄は販売する。2 月から搾乳を開始して自家消費し、羊毛を刈る。刈り取った羊毛はルムジェータル村に運び、家族の女性が敷物に加工する。2 月下旬から北上を開始し、3 月にルムジェータル村を経て、3 月下旬から 5 月中旬まで標高 2000~2500m の森林に滞在する。5 月下旬にソル地域に到着し、6 月上旬まで、標高 3200m 付近の、シェルパ民族住民が冬の

飼料を採取する採草地に滞在する。6月下旬にかけて標高 3800mまで徐々に高度を上げ、その後8月下旬まで標高 4000～4700mの高山草地で放牧する。8月下旬にシェルパ民族が住む標高 3200mまで一気に高度を下げ、10月上旬まで収穫後の畑でや周囲の草地・森林で放牧する。前述したようにソル地域をはじめ各地では、草地や森林はクランごとに利用する領域が決められているため、羊飼いは複数のクランのミザールに放牧料を納めるが、この点は後述する 1997 年以降の国家の森林政策変更で混乱が生じている。また同じ放牧地を利用することで、場所を巡るトラブルが発生することがある。一方、土地を提供する住民が移牧によって利益を受ける場合もある。収穫後の畑における放牧は施肥の効果があるからである。このように羊飼いは亜熱帯低地から高山草地まで標高差 4000mを移牧する。多大な労力がかかるとはいえ、この移牧にはいくつかのメリットが考えられる。まず、夏場の一定時期に多数のヒツジやヤギを放牧できるのは耕作限界を超えた高山草地以外には存在しない。また冬場は前述した繁殖上の戦略により収穫の終わった亜熱帯低地を転々とするが、最も大きなインセンティブは離乳した子羊の大きな市場が低地に存在していることにある。また彼らが広範な地域で移牧を始めた理由は、故郷であるルムジェータル村の人口が過密で、周辺に放牧可能な土地が少なかったからとする説明もある。

4．森林政策の変遷と移牧システムの関係

ソル・クンプ地域のいずれの移牧システムにおいても、居住地を離れて放牧する限りにおいてはある種の共有性を帯びた土地を利用したり、通常は他民族が利用している土地を使用したりすることになるため、移牧は自ずと社会的な関係を駆使しながら限られた資源を利用する生業となる。その資源は草原、森林および耕地であるが、このうち森林と草地は、共有地として民族や国等によって管理されることが多い。ネパールでは従来は森林の管理には国が直接関与することは少なく、民族集団による伝統的な管理に任されていたが、1957年に一部の私有林を除いてすべての森林が国有林とされた。しかし地域住民による適切な管理は国有林に及ぶことがなくなったため、山岳地域でも多くの森林が失われた。その後、ソル地域では 1993 年以降、ネパール政府の森林法改正を受

けた、住民による「サムダイ(コミュニティフォレスト利用者委員会)」結成後、大きな森林政策の転換があった。クンプ地域では1970年代に、地域の一部が国立公園(サガルマータ国立公園)に指定されたことにより、土地管理上の大きな変化があった。その管理の変化と移牧システムとの関わりを述べる。

(1) ソル地域における森林政策の変遷と移牧システムの関係

ソル地域では、従来は森林や草地がクラン単位の共有地として細かく区分され、1957年の国有林化後も、この制度が続いていた。しかし1993年の森林法の改正により、政府が国有林の管理を主張したことで、法的根拠のないクランの土地が国有林として厳格に管理されるようになった。そこでソル地域では郡の指導のもと、国有林内にサムダイを作り、森林をサムダイにより共同で管理することにより、従来のクランの森林に対する権利を確保することになった。ここで注意すべき点は、サムダイによる管理はヒマラヤ山岳地帯とは自然環境や文化が異なる丘陵地帯における土地利用をモデルにして成立したことである。1998年までに、ソル地域のベニ行政村に7つのサムダイが結成された。

サムダイによる管理がはじまって起こった目に見えて大きな変化は、森林管理の権限がクランの代表者であるミザールから、サムダイの合議制組織に移行したことと、これまで固定したメンバーで慣習的に維持されてきた土地の管理規範が明確に意識され、さらに言葉により明文化されたことといわれる。しかし以下のような問題点が持ち上がった。

1) クランの伝統的な放牧地の占有権との齟齬をめぐる紛争が起こった。

1例をあげると、ジュンペシ谷の上部にある広大な森林と草地は、従来それより下部のジュンペシ村のラマ・クランが占有していた。しかしジュンペシ谷上部に存在するパンカルマ村とモブン村は、法律に基づいてサムダイ(モブン・サムダイ)を結成し、ジュンペシのラマ・クランに代わりその森林と草地の占有権を得た。これは特に移牧を行う世帯にとって深刻な問題となった。これまで自分たちの放牧地であったものが、それを利用するためにモブン・サムダイに放牧料を支払わねばならなくなった。

2) サムダイ以外の外部メンバーが利用する場合の、薪や材木の採取料と放牧料

の問題が起こった。

前述したグルン民族を主体としたヒツジ・ヤギ移牧者との軋轢を例にあげる。これまでは羊飼いはミザールに放牧料を支払っていた。その額は比較的少額であった上、畑への施肥を仲立ちとした互酬的な関係もあった。しかしサムダイへの以降後、羊飼いにとっては2つの問題が起こった。1つは放牧料がミザールに支払っていた料金に比べて高くなったことである。2つめの最も深刻な問題は、従来クラン単位で単一的に放牧料を収めていた場所がサムダイ移行後は細分化したため、放牧料を支払うべき相手が多くなったことである。

- 3) これまで移牧に使用していなかった森林や草地を、サムダイが管理するようになったため、営利を求めて資源が無計画に乱伐・乱獲される事態が起こった。

1例をあげると、営利的な建材や薪のための伐採が密かに競争のように行われたり、飼料にするための枝の刈り取りも、再生を考慮せずに主幹部から切り取られることがあった。

以上の問題点は、境界を接した居住者同士および異なる生活圏をもつ集団同士で議論が続き、結論が未だ得られていない状況も多い。

(2) クンプ地域における森林政策の変遷と移牧システムの関係

クンプ地域では、前述した「ナワ」による森林と家畜の一括的管理方法がとられていた。しかし1976年にナムチェバザール、クムジュンおよびクンデの各村を含む一帯がサガルマータ国立公園に指定された。ここで注意すべき点は、この地域の国立公園化に対してエベレスト(サガルマータ)の初登頂者であるヒラリーの母国、ニュージーランドが強力にバックアップしたことである。同じ時期、ネパール政府は登山客やトレッキング客の増加を、観光収入の増加のチャンスと見込んで、入場料を取るために国立公園化を望み、援助国であるニュージーランドも観光客の増加に伴う観光悪化を阻止するために政策を支持した。国立公園化により、ナワ制度は廃止され、国立公園の森林保護官による管理が始まった。結果として、前述の村の周辺は国立公園の植林のために囲い込

まれ、一切の伐採が禁止された。また、公園管理者は公園内の家畜を買い上げて公園内から排除した。

5 . 今後のソル・クンプ地域における資源管理について - まとめに代えて -

前節のソル地域とクンプ地域の森林・草地資源管理と移牧システムとの軋轢は、一方はサムダイシステムの導入、もう一方は国立公園化が直接の原因であるため、共通には論じられない。しかし両方とも、ある種の外圧による共有地の資源管理化が、従来の制度に代わることによって引き起こされた。ソル地域のクランによる管理、クンプ地域のナワによる管理のいずれの従来型の管理システムも、森林資源だけでなく、居住者の耕作、牧畜を含めた生業や生活から生み出されたものである。一方、外圧による新しい管理システムは、生活の全体関連の中から森林の管理だけを切り離すことを要請している。国立公園化されたクンプの一地域ではそれが完結した形といえる。ソル地域では今後も議論が続き、土地管理システムも変容していくものと予想される。

ソル・クンプ地域のシェルパ民族は、ネパールのなかでも近年最も大きく外部世界の影響を受けてきた。それは1970年代から始まる登山・トレッキングをはじめとした観光事業が直接的に影響している。また、遠い地域とはいえ、カトマンズやダージリンへの出稼ぎや移住も関与している。ソル地域でも、移牧を伴った農耕を行う世帯は減り、代わってロッジの経営等トレッキング関連産業に従事する人が増えている。またそればかりか、出稼ぎや移住によりシェルパ民族が減り、官僚や教師をはじめとした職に就く他民族の人々が増える等、人口構成そのものが変容している村もある。そもそもシェルパ民族は、チベットからネパール世界に移住してきた民族である。チベットとネパールを結ぶ交易を担いつつ、外部世界との交流を積極的に行ってきた。移牧は、移住および交易とともに民族の特質を形成するものであり、彼らの生業である。今後、生業を通じた内発的發展を機軸とした土地管理を住民自らが望む限り、土地はまだ荒廃することなく、効率的な資源管理がなされていくであろうし、そうあるよう祈りたい。かれらがその場所にいなくなったときが、その独特の自然資源管理システムの終焉であり、その場の消滅であろう。

参考文献

- 1) World Bank (2004) The World Bank Group, World Development Indicators Data base, <http://www.worldbank.org/data>.
- 2) 畜産技術協会 (1996) ネパール畜産現地調査報告書、社団法人畜産技術協会、東京.
- 3) <http://apps.fao.org/faostat/collections?version=ext&hasbulk=0&subset=agriculture>
- 4) 山本紀夫、稲村哲也 (2000) ヒマラヤの環境誌 - 山岳地域の自然とシェルパの世界 - 、八坂書房.
- 5) 酒井治孝 (1997) ヒマラヤの自然誌 - ヒマラヤから日本列島を遠望する - 、東海大学出版会.
- 6) 京都大学東南アジア研究センター - (1997) 事典東南アジア - 風土・生態・環境 - 、弘文堂.
- 7) 土屋和三 (1996) ネパール・ヒマラヤの植生と家畜飼育、熱帯研究 5: 227-242.
- 8) 稲村哲也、山本紀夫 (1995) ネパール・ヒマラヤ・シェルパ族の環境利用 - ジュンペシ=バサ谷におけるトランスヒューマンス - 、環境社会学研究(1)、185-193.
- 9) 川喜多二郎 (1977) 中部ネパールヒマラヤにおける諸文化の垂直構造、季刊人類学 8(1).
- 10) 本江昭夫 (1996) ヒマラヤにおける草地利用、熱帯研究 5: 213-225.
- 11) 稲村哲也 (1996) アンデスとヒマラヤの牧畜 - 高地順応型牧畜の家畜移動とその類型化の試み、熱帯研究 5: 185-211.
- 12) 田先威和夫 (1996) 畜産大事典、養賢堂.
- 13) 鹿野勝彦 (1996) ヒマラヤ高地における移牧：高地シェルパの例をとおして、民族学研究 43: 85-97.

図1 ネパール東部開発地域とソル・クンプ郡（出典：山本紀夫、稲村哲也（2000）ヒマ
マラヤの環境誌 - 山岳地域の自然とシェルパの世界 - 、八坂書房）

図2 ソル・クンプ郡における主な街道と村（出典：山本紀夫、稲村哲也（2000）ヒマ
マラヤの環境誌 - 山岳地域の自然とシェルパの世界 - 、八坂書房）